

酔々流転の百鬼夜行

すいすいるてん

ひやつきやつこう



難しはや

好か背に來りに
溜める酒

手逢い足逢い
我し來にけり

——詠人不知



歳の瀬迫る十二月。大結界の要たる博麗神社の縁側、冬の日差しが落ちる陽だまりの中に、暖を取る猫のように寝そべって。萃香は愛用の瓢箪に口をつけて中身をぐびりと呷る。細い喉を抜く胃の腑へと落ちる酒精の芳醇な香りを愉しみ、伊吹童子はぶは、と満足げに息を吐いた。

吐く息も酒気を交えて白く凝る師走の冷え込みの中、肩口で破れた袖からは剥き出しの二の腕が覗いているが、この酔鬼は寒がる素振りも見せていない。

「今年の酒はいい具合に仕上がったねえ」

普段より丁寧な水と甕を吟味したのもそうだが、何よりも良い酒虫が手に入ったのが効いたのだろう。満足のいく出来栄えに頬を緩め、萃香は再び伊吹瓢箪に口を付けた。

ほんのりと色づく頬は酔気にとろりと柔らかく解け、小さな唇が瓢の口からこぼれる雫をちろりと舐める。

「……ねえ」

「んう？」

一人手酌で酒を愉しむ酔いどれ鬼へ、頭の上からの不満げな声。萃香がぐいと背を反らせば、不機嫌そうに腰に手を当てた霊夢が仁王立ちになって見下ろしていた。

いつもの紅白の巫女装束ではなく、髪を後ろで束ね、三角巾に割烹着姿。これも新鮮で良いな、と萃香は思う。

「暇なら手伝いなさいよ、大掃除」

「何言ってるのさ。鬼の前で来年の話なんて滑稽だよ霊夢。それに私の分はもう済ませたよ」

仏頂面で雑巾を押しつけてくる霊夢に、境内の隅に山と積み上げられた落ち葉を指さし、萃香はけけらけらと笑う。能力を使つて萃められた落ち葉の山は、見上げるほど大きなものだ。そのうち魔理沙あたりが目をつけて焼き辛でも始めることだろう。

「……あんたがそんなだから妖怪が集まるばかりで神社の評判も悪くなるの」

「あつはは。元々落ちるほどの評判もないだろうに。忙しいこと言ってるのと老けるよ霊夢。ほれ、一杯どう？」

懷から朱塗りの杯を取り出し、並々と酒を注いでみせる萃香に、霊夢は大きく吐息を一つ。

「それ、ほとんど酒精だけじゃないの。そんなお酒はかばか飲んでらんないわよ。鬼と一緒にしないで」

霊夢は呆れ顔で大掃除を再開する。鬼用の酒は人間のそれの比ではない。滅多なことでは酔わない巫女も、さすがに気安く飲めるものではないらしい。

一献を袖にされた萃香だが、嫌な顔一つ見せず、宙に浮いた盃を口に運び、ぶは、と馥郁たる香りに満足げに口を緩めた。

「……んむ」

杯の端を咥えて一息。このまま掃除の邪魔をして霊夢の機嫌を損ねるのは宜しくないだろうと考え、萃香は己を疎にして薄め、縁側を離れることにする。

疎密を自在にする力は萃香には息をするようなもので、そうと意識すれば彼女は幻想郷のどこにでも在ることができた。もとも

と生まれ持っていた力ではあるが、山を去って長い漂泊の間に、その傾向はより強くなったように思う。

神社の鳥居の上に、萃香は拡散した己を再び萃めて実体化する。

「大分冷えるね。あちらはそろそろ根雪かな」

冠を白く染めた妖怪の山を見上げ、納戸から少々、失敬しておいた粗塩を皿の上から小指の爪に乗せて舐める。丸みのある粗塩は素朴ながら、鬼の酒に良く合う酒肴だった。

酒精をゆつくりと口に含み、時間をかけて喉へと落としてゆく。大結界の端に位置するこの神社からは、梢よりも高く飛べばすぐに幻想郷を一望することができた。

俯瞰した冬の景色にいつかの日に見た幻想郷を重ね、萃香は満足げに胡坐をかいて伊吹瓢を傾けた。

「……変わらんようでも、変わるもんだね」

思えば、萃香は随分と長い時を漂泊の中で過ごしてきた。妖怪の山を離れ、地底を出、幻想郷のあちこちを巡り、果ては冥界や天界にも足を伸ばした。大結界をすり抜けて外の世界を放浪したこともある。外では妖怪の存在は酷く曖昧で、萃香はほとんどどこにも姿を現す事もできなかったが。

けれど、いまや伊吹萃香は強く意識してここに居ることを選ぶようになった。それもまた大きな変化であるのだろう。

赤い鳥居の上、ぶらりぶらりと足を揺すって、穏やかな酔いに己を任せる。ここは萃香のお気に入りの場所のひとつなのだが、神社の顔とも言える場所に鬼が陣取っていることに對して、霊夢はあまり良い顔をされないことが多い。

案の定今もそのようで、鳥居の上の鬼を見上げて、博霊の巫女は不満げに口を尖らせる。

「ちよっと。宴会の準備くらいしていきなさいよ。あんた、いつも集めるだけ集めて放つたらかしじゃないの」

「あつはつは。鬼は酔うのが仕事つてね」

茶化すと同時、空を割いて符が飛んでくる。今日の巫女は大大ご機嫌斜めの模様だった。追尾効果付きの妖怪調伏の符から霧へと変じて身をかわしながら、萃香は鳥居を蹴って宙へと舞い上がる。

「悪いね、今日はちよいと先約があるのさ。少しばかり出かけてくるね、霊夢。……宴会までには戻るよ」

返事はなく、代わりに飛んできたのは封魔針。首を竦めてそれを避け、萃香は疎密を操って、神社からしばし離れた森の中に出現した。

「……さて」

周囲の気配を探り、誰もいないことを確認しつつ、萃香は懐から書を取り出した。最近流行の郵便封書とは違う、仰々しい堅文^{たてがみ}。差出人の名は無く、書状の表には、かつて妖怪の山を支配していた鬼、伊吹萃香に宛てた名が記されている。

昨日、萃香のもとに届けられたこの書状は、至急の要件をもって彼女に逢いたい、という至極単純な内容だけが記されていた。

「鑄沢の七本杉ねえ。山の真つた中じゃないか」

待ち合わせの場所は、天狗が妖怪たちの支配地域として主張する八つの峠のひとつだ。見知らぬものが入り込めば、ものの数分で鎮台の哨戒天狗大隊がすつ飛んで来ることだろう。そんな場所を指定してきたというのは、それだけでも恐ろしく胡散臭い。

「……どうにも面倒事のような気がするけど、どうなるかねえ」
いくら怪しいといえども、行かない理由にはならなかった。鬼

を相手に、これは冗談では済まされない。書状を畳んで懐へと戻し、萃香は伊吹瓢に栓をして、ぐいと背をひと伸び。

とん、と地を蹴れば、鬼の姿は霞よりも軽い疎の霧へと変じ、風よりも早く地を駆ける。酔いに任せて拡散しすぎないように気を遣いながら、萃香は一路北西、妖怪の山へと進路を取った。

一陣の疾風と化した鬼は、山から続く溪流を駆け抜け、冬後森の準備を始めた河童たちの集落を見降ろし、まだ紅葉の名残を残す九天の滝で梢を揺らして、妖怪の山の山麓へと身を躍らせる。雪を頂く山は一足早く冬の気配を覗かせていた。山の中腹では積雪こそまだないが、霜柱が凍らせた地面は硬く軋み、かと思えば日差しの下でぬかるんでいる。溪流に張り付く白い霧は、手足を凍えさせるほどに冷たい。

冬にあっても莫大な水量をもつて流れ落ちる瀑布の周辺には、今日も神妙な面持ちで白狼天狗達が哨戒任務にあたっていた。

(……うむ、お勤め御苦労)

悪戯つぽく口元を緩め、萃香は己の気配すらも極限にまで疎に薄め、十重二十重の厳重な白狼天狗たちの警戒網を気付かれることなくすり抜けていく。

山を登ってゆくにつれ、標高とともに植生も変化してゆく。赤や黄色の鮮やかな落葉樹は姿を消し、冬でも黒々と葉を茂らせる杉林が静謐に立ち並ぶ。やがてそれらも姿を消し、森はいよいよよ人の手の入らぬ古代の姿へと変じていった。

萃香が十人手を繋いでも取り囲めないほど太い幹をした古木の間を潜りぬけ、鬼は待ち合わせの場所へと辿りついた。

時刻まではまだ半刻ばかりある。急ぎすぎた——という訳ではない。萃香は最初からここで相手を待っているつもりだった。

己の背丈の十倍もあるような大岩の上に陣取って腰を落ち着け、萃香は再び腰の伊吹瓢を手に取り、トンとその底を叩いた。溢れだした酒を口に含み、ぐびりと呷る。

「さて、退屈しないことを願いたいね」

そう言う鬼の表情は、どこか楽しげなものだった。



徐々に深まる霧の中、刻限よりも少し前になって、待ち人は白霧の向こうから姿を現した。

数は三名、いずれもが天狗。それぞれが顔をすっぽりと覆う面を着けていた。

中央に立つのは濡れ羽色の翼をした鴉天狗。左右に従っているのは刀に盾を携えた白狼天狗だ。流石に抜刀はしていないが、胸当てに面頬、手甲脚絆の戦装束。鎮台はいつから戦時体制に入っただろう。

「お待たせ致しました。お早いお付きで」

「ふん、詰まらない嘘をつく」

萃香は頬杖をついて天狗たちの姿をにらみ付けた。名乗ることもなく、顔を隠しているのは、自分達の勢力と出自を悟られないためと、自分達がひとつの勢力であることを誇示するためだろう。

白狼天狗の元締めは犬走の長だったはずだが、その彼等が鴉天狗と同じ装飾の面をつけていることから、少々天狗の常識とは外れた集団と言えた。

「鬼を侮るなよ。私が気付かないでも思ったのか？」

「御気分を害されたのであればお詫びいたします。ですがこれも全ては大義のため。どうか平に、ご容赦を」

猜疑心と警戒の強さは天狗の十八番だ。どうせ刻限になるまでずつと遠くからこちらの様子を窺っていたらうに、彼らは今しがたやってきたとばかりの態度をとっていた。そんな建前も、いちいち鬼の気に障る。

先頭に立つ鴉天狗——声の調子からするに女だろう。萃香は既に妖気を薄めることをやめていたが、そんな鬼を前にしても物怖じする気配はなく、落ち着いたものだ。

……もつとも、人前で虚勢の一つも張れない天狗など、とてもあの妖怪の山では生きていけないだろうが。

「このような場でお迎えすること、お赦し下さい。事は内密に運ばねばなりませんので」

これも嘘だ。萃香は既に己の気配を隠していない。山の警備がよほどの節穴というのでもなければ、鎮台の警備はとくに萃香のことを察知している筈であった。少なくともこの面会の間は哨戒大隊が現れないことは織り込み済みなだろう。彼らはそうして、この峠を支配下に置いていることを言外に示しているのだ。

いざ決裂となれば、ここにいる使者たちの口を塞いで、鬼が偶然にも、再び妖怪の山へと現れたという体を取るつもりなのだろう。つまらない小細工だと不機嫌になりながら、萃香は岩倉上に胡坐をかく。

「不羈奔放の古豪、伊吹萃香様。まずはお越しいただいたことを感謝いたします。この度は——」

「ああ、止しな」

烏天狗の口上を遮るように、萃香は手を翳す。

「こんな寒々しい場所ですら長々とお前さんの世辞と挨拶を聞いたところで、私はちいとも愉しくない。さつさと本題に入ろうじゃないか。……こんな事をして、お前さんたちは私に何がさせたい？」
「かつての妖怪の山の秩序を取り戻すのです。現在のような欺瞞に満ちた支配を糾_{ただ}し、堅固にして強靱なる秩序を、再び御山に齎す時が来たのです」

強めた鬼の視線に動じることなく、淡々と面の鴉天狗は目的を口にした。

博麗大結界ができるよりも以前、妖怪の山には鬼を頂点に抱いた、ピラミッド型の支配体制があった。彼女達はその再現を望む一派であると自称する。

つまり——彼等は、萃香に再び山の頂点に立ち、統治を振るって欲しいと申し出ているのだった。

「へえ」

彼女達からは視線を切らずに、萃香は伊吹瓢を傾けて酒を呷る。
「意外だね。お前たちはもう、私達鬼の事など邪魔にしているのだろうと思っていた」

「遺憾ながら、今の御山ではそう考えている者は多いでしょう。」

……ここに、いまの上層部には」

「当然だろうね。大天狗どもも、天魔も、折角勞せずして手に入れた支配者の地位を、誰が好んで渡すのかってことだ。窮屈な上もいなくなつて、ようやく好き放題できるつてのに」

「我々はその現状を憂えています。萃香様のお耳には届いていませんでしょうか。昨今、多くの信仰を集める者たちが立て続けにこちらへとやってきました。彼等は多くの者たちの信仰を競うよう

に集め、その権勢を目に日に増しているのです」

努めて冷静を保とうとする彼女の口調が、感情のぶれを見せる。やはりどこか青い。さほど歳をとっていない若い天狗だろうと萃香は推測した。精々が百か二百歳。結果ができる頃のことを見知っているかどうかは怪しいだろう。

「そのために、妖怪の山も備えなきゃならないと？　しかし確か、天狗達は守矢の二柱を信仰していたらう」

「存じでしたか。表向きはそうなっていますが、相互に利があるから協力をしているに過ぎないことは、羽根の生え揃わない赤子でも知っています。そも、妖怪が神を信仰するなど笑止千万。どこからも距離を保って孤立してしまうならば、いづれかの勢力と繋がりを持つことで、他の派閥の情報を得ることができるという程度の浅慮でありましょう。」

そのような無様な姿、もはや看過できません。伊吹萃香様。どうか——再び、我らの長に」

彼女の言葉は、言外に今の山の支配体制を強く批判していた。かつてのように恐れ、畏怖され、遠ざけられた異郷としての『山』の在り方——畏敬と崇拜を持って迎えられた山の主のような信仰を、彼らは求めているのだ。

その象徴として、かつて山の頂点にいた鬼が、今再び必要とされている。

「ふむ……」

山でも古参の妖怪、特に鬼の直接の配下だった年寄り連中の天狗達は、総じて鬼の支配を嫌っているものだが——若い天狗達だけが若さに逸つて起こした行動にしては少々、手が込んでいると言えた。

（一人二人、冷や飯を食わされている大天狗あたりが後ろ盾をしっている——のかね）

酒を傾けつつも頭の一部を冷ましながら、萃香はそう推論した。こんな酒の呑み方は窮屈で仕方がない。額に皺が寄るのを自覚しながら、萃香はさらに酒を口に含む。

幻想郷が、信仰を巡っていくつもの勢力が乱立する新たな局面を迎えたことは、萃香も知っていた。

守矢の風祝とは萃香も直接面識がある。いかな異変を前にしても物怖じせず、興味のままだに騒動の渦中へと踏み込む彼女は、最良目を抜きにしても萃香にとっては好ましい人間だった。蛮勇と果断の差を弁え、確かな信仰を己の礎に育む娘——東風谷早苗と彼女をそうやって育てた神達を、萃香は決して軽んじるつもりはない。

だから、当然の帰結だった。

「結論から言おう。——お断りだよ」

その回答を——恐らく彼等も予想はしていたのだろう。特段、気配を変えることもなく受け流していた。あるいはあの面を剥がせば驚きくらいは見せていたのだろうか。

「何故です。かつての山で、あなたはそれを成した筈。現を追われた妖怪たちを受け入れ、率いて、絶対的な強者として幻想郷に強固な秩序を築いた。蒙昧なる人間達に、我ら妖怪の恐怖を刻む——それをもう一度、成すのはあなたの悲願だったのではないのですか。かつて人間達に卑劣な手段で大江山を追われた貴方こそが、我らの苦しみ何よりも深く理解していたはず！」

「やれやれ。言つてやらねば解らないのかね」

がりがりと頭を掻いて、萃香は傍らに伊吹瓢を叩き付けた。ず

しん、と重々しい地響きが山を揺るがす。

「私も鬼をやつて長いが、どういいうわけかたまに、お前たちみたいな連中が出てくるんだ。いいかい、私は神輿にされるのは御免だし、お前たちは根本的に鬼つてものを履き違えている。悪いが私にはお山の大将なんてもう興味無いんだよ。どうしても鬼が必要だつてんなら、他を当たってくれ」

引き受けるような連中はそうはいないだろうが——と、胸中で付け足して、萃香は膝を立てる。

「私はね、別にあいつらの親分になりたかつたわけじゃない。ただ、私が思うがまま、私が望むがまま、鬼であつただけさ」

確かに、人の世界を追われ、妖怪の山に引つ込んだ時分には、萃香も妖怪達の支配者としてあることが誇りだつたのかもしれない。天狗も河童も、個々の問題はあれど種族としては従順であり、力の象徴である鬼達を必要なものとして受け入れていた。とりわけ大きな問題はなく従っていたように思う。

けれどそれらは、鬼の——萃香の求めるものとは根本的に違つていたのだ。

「私はね。私の評判だけを訊いて、私を量ろうともせず従おうとする連中のことが、とりわけ嫌いなんだ」

これで話は終わりだと、腰を上げた萃香に——

「そうはいかない」

明確な敵意を見せ、天狗が答えた。
「貴方でなければ困る。妖怪の山を総べるのは、かの大江山の頂点であつた伊吹の酔鬼、酒天童子を置いて他にない」

言葉と共に——白狼達が剣を抜く。

萃香は少なからず驚いていた。

自分が鬼であることにそれなりの自負があつたのだ。木端天狗ごときが、いくら上の命令だからとて、本気で剣を向けられることはないだろうと思つていたからだ。鬼を前に気を萎えさせていないのは大したものかもしれないが、それにしても彼らの行動は短絡的に過ぎる。

(それとも、そんな事を忘れるくらい、天狗は腑抜けたのかね)

ここまで直接的な手段を講じるしかないほどに、天狗たちは昔を忘れたというのだろうか。かつての天狗達であれば、鬼との間に生じた修復できない亀裂を知つていただろうし、それを飲み込んで主に迎えようとするなら、もつと厭らしく避けようのない手段を選んだだろう。

だが、権力構造のために鬼を利用しようとするくらいだ。もはやかつての決裂はとうに忘れられているのかもしれない。

「ふん。詰まんね。そんなものか、天狗」

「それはこちらの台詞だ。そこまで、人間の巫女ごときに懐柔されているとは……嘆かわしい」

「……は？」

苦々しげに鴉天狗が吐き捨てたその言葉が、あまりにも外的過ぎて。萃香はしばし呆然としていた。

「どうした」

「——つ、は、は、ははははははははははは!!」

朗々と響く高らかな鬼の笑い声が、霜に覆われた梢を揺らし地を鳴動させる。

呵々大笑する鬼に、啞然とする天狗の前で、萃香は可笑しくてたまらないと目尻に浮かんだ涙をぬぐつてみせた。

「いやあ、良いねえ。久々に笑つたよ。冗談も大概に——ああ、

いや、お前達がそう思うのも無理がない、のかな？」

「痴れ事を！」

擲^な擲^なわれたとても思ったか、天狗達は一斉に動いていた。左右の白狼天狗が獣の咆哮とともに地を蹴り、鋭く刃を打ち払う。巻き上がる土砂とともに、渦巻く弾幕が萃香を取り囲んだ。

弾幕を放ち、左右からわずかに間合いをずらす打ち込みは、練度の高さを窺わせる優れた連携だ。やはりかなりの腕前。誰が仕込んだかは知らないが、哨戒役にしておくには勿体ない腕だ、萃香は思う。

その後ろで烏天狗も、葉団扇を抜いて羽根に風を蓄える。十分に力を練り上げ、岩すら砕く鋭い風の渦を放つ構えだ。先行する二人の白狼は、いざとなればその身をもって萃香の動きを封じ、もろともに天狗礫をかぶる覚悟だろう。

もつとも、萃香はいずれの刃も弾幕も受けてやる気はなかった。押し寄せる弾幕の密度を疎にして、あつさりとその隙間をすり抜ける。

右から打ち込まれる刃を掴み取り、大根でも引き抜くように無造作にその身体を振り回した。

「——ッッ!」

決して小柄とは言えない白狼天狗の身体が頭陀袋のように宙を舞った。左の白狼天狗は、盾の上から同僚の身体を叩き付けられ、溜まらず姿勢を崩す。

「およ、思ったより上手くいかなかったな」

刀の刃筋を掴み取るのは勇儀の得意にしていた戦い方だが、見様見真似では無理があつたらしい。僅かに剥けた指の皮を見て、萃香は吐息。

折り重なる白狼天狗二人に霊撃を叩きこんでまとめて吹き飛ばし、萃香は密から疎、疎から密へと己を変じさせ、鴉天狗の眼前へと迫る。仮面越しにもはつきりと彼女が驚愕を露わにするのが分かった。

その瞬間だった。

「――祈願^{祈願 屍鬼が代わりて戦わんことを、急ぐは命令のしぐ成せ} 屍鬼代戦、急々如律令！」

響くのは口訣。導引とともに力となる言葉とともに新たな姿が戦場に割り込む。姿を消し潜もうとも、不意打ちくらい萃香には察知できるはずだった。しかしそれが叶わなかったのは、相手に呼吸も気配も存在しないから。

強張った跳躍で兎歩を踏み、鬼の察知できぬ死角に潜んでいた影が宙へと踊り出る。

——毒爪「死なない殺人鬼」

振るわれた一对の爪を、萃香は避け切れなかった。

腕と肩、深く食い込んだ爪を引き寄せるように、背後から現れた気配が萃香の肩に思い切り口が齧り付く。

緋金^{あかねがね}、鉄^{くろがね}の鬼の肌ががざりと金属質の音を軋ませた。乱入者はそのまま牙で萃香の首筋を噛み千切ろうとしているようだ、鬼の肌はそう容易く食い破れるようなものではない。

問題なのはむしろ爪のほうだ。緑と紫に滴る毒を纏わせた爪は、萃香の二の腕に深々と突きささり、じゅうじゅうと毒が身を焦がす煙を上げる。

「このっ」

顔も確かめぬまま、萃香は当て推量で力を籠めてそいつの腹を

ぶん殴る。どてつ腹をぶち抜くくらいの力加減をしたつもりだが、そいつは底知れぬ執念深さで萃香の肩肉を齧りつついった。

地面を転がって吹き飛んだ影は、発条のように飛び起き、額の札を揺らして愉快そうに叫ぶ。

「おお……やったぞ、青娥さま！」

血の通わぬ色の悪い肌、身体に針金でも通されたようなぎこちない動き、冷素を吐きだす冷たい身体。屍体だ。

「あらあら。大丈夫、芳香？」

「おー。勿論だ、ちゃんと言いつけどおりにやっただ青娥様、褒めてくれー」

いつの間にか、地面に大きな穴が穿たれていた。綺麗に縁取りをしたような乱れの無い深淵の穴——ばかりと開いた虚ろから、甘ったるい香りが流れ込んでくる。

姿を現した青髪の女は、羽衣に腰かけて宙を舞いながら、屍体の頭をよしよしと撫でた。

その姿を萃香は知っていた。先年、聖徳王一派と共に復活した邪仙だ。隣の屍体は彼女の使役する僵尸^{キョウシ}。霊夢にやたら執心で、毎日のように壁をこじ開けては姿を見せていたが——

「最近顔を見せなくなっただけだと思っただら、こんな事を企んでたのか」「ええ。霍青娥と申します。その節はどうも。ご無沙汰いたしておりますわ」

鴉天狗たちの後ろに陣取り、邪仙は紅を引いた唇を撫ませくすりと微笑む。

「この子は芳香。私の可愛い死体ですわ」

「何でもよく食べ元気な死人だ——」

に、と長い牙を覗かせて、忠実な死体はびよんぴよんとその

場を跳ね、散らばる木々や岩を片端から吸い込んで噛み砕き、腹に空いた傷を癒してゆく。

じゅうじゅうと肌を焼く爪の毒に顔をしかめ、萃香は邪仙に視線を向ける。

「そうかい。しかし、鬼を食い殺すにやご自慢の死体もちよつと力不足じゃないかね」

「いえ。これでいいですよ」

ふわり、あたりに漂う甘い香りが一段と濃くなる。

「この子に体の一部を食べられた人間は僵尸^{キョウシ}になります。そして先程の符はそれを人間以外にも適用できるように強化したもの。つまり、」

青娥は袖から取り出した符を、無造作に放る。ひらひらと額へと張り付く符を、萃香は避けることができなかった。

「これで貴方は私のもの」

邪仙の紅い唇が弧を描く。

符にびつしりと書き込まれた仙術式が羽虫のような音を立てて起動し、萃香の身体の支配権を奪いとり上書きしはじめた。

「どうかしら？ 動けないでしよう？ ああ、暴れても無駄ですわよ。芳香の毒は特別性ですから」

「おおー！ 頑張ったぞー！」

「神変鬼毒か……」

舌打ちをする。かつて自分を討った人間達が使った毒だ。

実のところ、鬼の身体は毒にはさほど強くはない。効いていないように見えるのも無尽蔵な体力に任せているだけで、大抵は毒が回り切る前に成分が劣化してしまうにすぎないのだ。

視界を塞ぐ符の下で、おぞましい毒と呪詛が萃香の体を蝕んで

ゆく。

鬼も同じ文字を書く。永く生きた妖怪の常として、荳香は日本古来の隠仁であると同時に鬼としての性質を取り込んでいる。そして大陸では鬼は仙人の使い走りであった。

「……天晴れな悪女ふりだね。こんな事を仕出かして、聖徳王に愛想を尽かされても良いのかい」

「あら。太子様はそんな器の小さな方ではありませんわよ。このくらい日常茶飯事ですもの。お咎めはありませんわ」

本気かどうか定かではない事を言い、くすくすと笑って青娥は荳香の頤に手を添えた。

「大した信頼だね。……しかし、よりによってこんな奴に引き込まれるとは、天狗も腑抜けたもんだ。やつぱり一度顔を出さなきゃダメだなあ」

「あらあら。口だけは威勢の良いこと。いっそ本当に殺してしまおうかしら？ 動けなくても傀儡の変わりは務まりますわよね？」

肩越しに天狗たちを窺う青娥。面を付けた天狗達是否定も肯定もせず、無言のままだ。

「それにね、決して貴方にも悪い話ではないと思いますのよ？ だって、ほら」

青娥は碧に塗った爪でつい、と荳香の唇を弄ぶ。

「妖怪の山が隆盛すれば、巫女とて動かないわけにはいかなくなるでしょう。そうすれば貴方は再び、あの子と対峙できますわよ？ 異変解決などという、まやかしのごっこ遊びではなく——貴方が心の底での望む、人と鬼の対峙という形でね」

すっと、心の底を抉るような言葉だった。邪仙の漂わせる甘

つたるい毒気が濃さを増し、荳香の意識を侵食してぐずぐずと腐らせていく。

この邪仙は本当に、上辺の言葉で他者を誑かすのに長けていた。自身の認める人間との、正々堂々の戦い。

それは、大江山の首魁としてあつた伊吹荳香が、平安の昔より忘れる事もできずに心に抱き続けた悲願であつた。

「——は」

顔も上げずに、荳香は嘲笑った。俯いた顔を隠す符が小さく揺れる。

「性悪め」

「お褒め頂き、光栄ですわ」

「じゃあ、ついでに知らないようだから教えてやろうか」ずるり。

符に支配を奪われたはずの荳香の身体が、煙のように溶け崩れたのはその時だった。邪仙が顔色を変えるよりも早く飛び出した芳香を跳ね飛ばし、霧へと変じた荳香は、額の符と僵尸に噛まれた部分だけをその場に残し、すぐ近くの岩の上に実体化した。

「我が群体は百万鬼夜行——。そんなつまらないもので、鬼を従えられると思うな!!」

己を限りなく疎に分解することで、制御を奪われた身体の一部と、流し込まれた毒だけを身体から除いたのだ。

「祈願 屍鬼創造、急々如律令!」

しかし青娥もただでは転ばない。素早く口訣を唱え導引を結ぶ。同時、青娥の傍にも同じように、もう一人の荳香が姿を見せた。壁抜けの邪仙は荳香が降り捨てた部位を寄り集め、僵尸へと創り直して支配下に置いたのである。

持つて行かれたのは力の総量からすればおおよそ四分の一。その分だけ己が『薄く』なったのを萃香は実感していた。しかし酔鬼の口元は焦りどころか、笑みを覗かせる。

「久々に、全力でやっても良さそうだね！」

叫んだ鬼はぎりりと拳を握る。掴み込まれたわずかな塵が、密の力で一点へと収束。限界を超えて圧縮された塵は、大きさを限りなく零へと近づけ、ついには自重で崩壊し始める。ブラックホールの発生だ。

萃香は躊躇いなくそれを邪仙へと投げ放った。とつさに竹杓を身代わりに通じ、逃れる邪仙をよそに、超重力の塊が天狗達の翼を絡め取る。天狗の全速力ですら逃れられない空の「か所を『下』にしてしまう密の極みに、彼等は為すすべなく動きを封じられる。

「せーが様——！！」

——走火入魔。
ソウファイロウモ

主の危機にいち早く反応したのは二体の僵尸だ。芳香が矢のように飛び出して、毒爪を振るって萃香の肌を引き裂き、額に符を貼られた萃香の分身も巨大化しながら拳を叩きつけてくる。

がおん、と山肌に大穴を穿つ分身の拳を真っ向受け止め、萃香は凄烈な笑みを覗かせた。力を入れた鬼の肌で、芳香の爪はあっさりと弾かれ、分身の腕はべきりと折れ曲がる。

「——まだまだ」

伊吹の酔鬼はじやらりと、腕に下がる鎖を引き寄せ、ぐんと力を入れて振り回した。

宙を走った鎖は、瞬時に数倍の太さへと変じ、僵尸と化した己の分身を縛り付けた。普段の数倍に太くなる鎖は、事物の『相』を絡めて固定し、あるいは操作する力を備えている。

鎖に両手を封じられながらも、分身はその場に踏み留まり、引き寄せられることに抗おうとした。

「うーおおお——！！」

限界を越えた動作で忠実な死体が奔る。使えない腕は無視して、萃香の頭を丸ごと齧らんばかりに大顎を開いて襲いかかってくる。萃香が分身と綱引きをして動けない状態を狙ったのだ。

「悪いね、お前さんの相手は後だ」

萃香は片手で器用にぐびりと伊吹瓢を呷った。小さな身体の胸がぐんと膨らんだかと思うと、灼熱の炎が吐き出される。燃え盛る焰は煌々と空を焦がし、忠実な屍体を直撃した。鬼の業炎に全身を巻かれ、芳香は左右の足を燃やされ、人の形を失って地面を転げ回る。

一方、縛鎖から力づくでは逃げ出せない悟った萃香の分身は己の能力を用い、身体を『疎』にして拘束を逃れようとした。が、萃香はそれ以上の力で相手を『密』に押し込め、離脱を防ぐ。

同じ能力を持つ同士では、その力の強い方が勝つのは道理だ。萃香は力任せに鎖をぐいと引きよせ——握りこんだ拳を分身の腹へと叩き込んだ。

栓を抜いたような甲高い音を響かせ、分身は破裂し塵一つ残さずに吹き飛ぶ。力を失った符がべらりと地面に落ちた。

「……なんだ、案外脆いもんだな、私も」

五割程度の力で殴ったつもりだが、それで消えてしまうくらいではそもそもまともな鬼として成り立ったかどうか。

「く……！」

青娥は大きく気を吸い、胎内で練り上げた丹と気を放った。青く輝く燐光が溢れだし、萃香へと迫る。

孤魂野鬼^{グレイエクト}。呼び出した屍鬼を持って相手を喰う濁業術である。萃香は慌てず掲げた両腕を地面へと叩き付けた。轟音と共に数十の巨大な火球が呼び起こされて次々に爆発。連鎖する炎に邪仙の放った光はあっさりと飲み込まれた。

陽の塊である鬼の酒気による焔だ。屍鬼などひとたまりもなく燃え尽き、跡形もなく灰へ変わる。たとえ仙丹で鋼と化した邪仙とても例外ではなかった。腕を炎に巻かれ黒焦げにされた邪仙は、苦し紛れに地を穿ち、仙術をもって巨大な岩を萃香へと投じた。十丈にも及ぶ大きさの巨岩は、しかし萃香の拳であっさりと爆ぜ割れる。砕け宙を舞う瓦礫の中、青娥は驚愕に目を見開いた。萃香は砕いた岩を再び一所に『密』し萃め、そのまま邪仙へと投げ返す。

仙人と言うのは基本不死で、倒すということが難しい。ゆえに術を比べ合い、相手に叶わないと認めさせることが肝要なのだ。

「……これは……!!」

顔色を変える邪仙を庇うように、黒焦げの僵尸がその前へと躍り出た。身を挺して肉の壁で主をかばった忠実な死体は巨岩の直撃を受け、粉々に砕けて吹き飛び、あたりに色の悪い臓物をぶちまける。

ほとんど形も残っていない芳香の手足は、それでも執念で萃香にしがみ付き、抵抗を試みってくる。

「うむ、ご主人。これは逃げるが勝ちだぞー」

半分焦げた顔で主に進言する芳香。言われるまでも無いのだろう。邪仙は素早く髪に刺していた鑿でトンと地面をえぐる。足元に転がった部下の首を抱えると、青娥はばかりと空いた深い穴の中へ身を投じた。

「……ふむ」

あつという間に二人の気配は消え失せ、地面に空いた穴も塞がってゆく。仙術の腕に比べても見事な逃げ際と言えた。

見事なまでの窮地を察する嗅覚だ。性悪な本性を含め、実に厄介な相手だと言える。おそろくあの邪仙はああして長い時を生き抜き、興味の赴くまま事態を掻き回し、優れた英雄の傍らに侍ってその生涯を見届けて来たのだろう。

鬼も角も邪仙たちは退場し、残るのは天狗達だけとなる。

「さて、どうにもお前さん達は、鬼というものが何なのか忘れているらしいね。……まあこれは私のせいでもあるな」

ひとりごちながら、萃香は天狗たちへと向き直る。

荒ぶる鬼の戦いを目の当たりにし、もはや彼等の士気は瓦解していると言つて良かった。いち早く背中を見せた鴉天狗に続き、白狼の片割れも尻尾を巻いて逃げだす。高慢の権化とは思えない醜態を晒す天狗達の中――

一人だけ、しつかと剣を構えてこちらに向かう白狼天狗の姿があった。確か、最初に萃香に斬りかかって来た方だ。

「――ッ!!」

驚いたことに、彼女はまた年若い娘だった。

割れた面の隙間からは、ぎらぎらと獣の眼光が覗いていた。強敵を前になお怯まない、この国からは失われて久しい狼の矜持をそこに垣間見て、萃香はわずかに口元を緩めた。

「……そう。それでいい」

その独白が彼女に届いていたか。

白狼天狗はもはや盾など意味がないと悟ったか放り出し、両手に剣を握って、肩上に高々と掲げ構える。渾身の太刀を振り下ろ

すだけの、二の太刀を考えもしないまっすぐ馬鹿正直な構え。
鬼というのは厄介なものだなど心の中で苦笑して。咆哮と
共に地を蹴る白狼に、荳香はしつかと拳を握り迎え撃った。



騒ぎに騒いだ年末の宴会も終わり、人妖はそれぞれに神社を辞
していた。いまだ酒の匂いが立ち込める広間は、冷えた鍋に空の
皿、倒れた杯にコップが積み重なって惨憺たる有様だ。

飲み比べに無茶をして酔い潰れた魔法使いを引きずって、付き
添いの河童が離れへと歩いて行くのを尻目に、別れを惜しむ紅魔
館の吸血鬼達を見送って、霊夢は静かに吐息した。

「どいつもこいつも好きなだけ暴れて帰ってくのよね」

宴会場となった広間の惨状を出来るだけ視界に入れないよう
しながら、縁側へと向かう。火照った顔を袖で仰ぎながら、懐に
確保していたとっておきの一本を手縁側へ腰を下ろした。

開け放った障子から吹き込む夜気が、広間に溜まった熱を冷ま
してゆく。午後から断続的に降り続いた雪で、神社の境内はすっ
かり白く染まっていた。

「れーいーむー」

ととと、と小さな足音に、甘ったるい声が聞こえたと同時に、ど
んと背中を抱きついてくる小さな感触。服越しにもはっきりと分
かるほど、火照った額がぐりぐりと背中に擦りつけられる。

「なんだよー。もうちよつと構えー」

「ああもう……」

傍から見れば肩幅よりも立派な両の角が量や襖を引き裂きそう
だが、角は実体をもたぬかのようにそれらをすり抜ける。冬場に
布団に潜り込んだ時、角が擦れて痛いと言文を言って以来、荳香
は角の扱いに気をつけるようになった。

ごろごろと顔を擦りつけてくる荳香に押し切られて、霊夢は根
負けするように膝を貸す。酔いどれ小鬼には満足そうに巫女の膝
に頭を乗せ、ほにやりと酔いに蕩けた表情を緩ませた。

「うむ。いい具合だねえ。欲を言うとも少しこら辺に肉付きが
あれば――あ痛たた。霊夢、冗談。冗談だって」

頬に呪符を貼り付けられもがく荳香は、火傷しそうな手付きで
それを引き剥がす。

十の半分を越したかどうかという小さく幼い体軀には、ただの
娘にはあり得ない無視できない力強さと存在感が有った。

白い肌によく目を凝らせば、古傷がたくさんその痕を刻んでい
る。敢えて消さずにいるのだと、荳香は以前霊夢に酔いの中で語
った事が有った。

「……ん、どうしたの、霊夢」

膝上に寝転がる荳香と視線が合い、霊夢は深く溜息をついた。
「別に」

短く答えるが、それでも荳香は膝の上から不思議そうに見上げ
てくる。とうとう根負けして、霊夢は口を開く。

「……なんであんな、そんなに私に構うのよ」

「そりゃあね、妖怪だからさ。博麗の巫女のことには気になるよ」
その名は、良かれ悪しかれ妖怪達には決して無視のできないも
のだ。幻想郷の調停者として彼女の動向は気に掛けねばならず、

敬意を評するのだ。

けれど萃香のそれは、他の妖怪たちのものとは少しばかり違うような気がした。

「簡単だよ。鬼が人を攫うのは、そいつが欲しいからさ。私たちはそういうふうにできている」

財を集め、人を集め、罪を集め、欲を集めて荒ぶる。それが鬼というものだ。

「霊夢。お前が欲しいと言っうなら、あの月だつて砕いてみせるよ」
「そんな事されても嬉しくないわ」

結局、萃香の言いたいことが良く分からず、霊夢は右手の盃に注いだ酒をついと口に運ぶ。化粧気の薄い、小さな唇が酒精を含み、白い喉が小さく上下するのを、萃香はじつと見上げていた。

人と妖怪とは河の彼岸と此岸。届かぬ隔たりのあるもの。妖怪がよかれと思っうことは多く、彼等には迷惑でしかない。分かり合おうとすることは悲劇を呼ぶのだ。

「……頼公達もさ」

ぽつりと、独白のように萃香は言う。遥か昔の平安の世、鬼を討った、源氏の武士たちのことだ。

「あいつらの事情も、分らないことはないんだよ。私と最初に出会ったときとは違って、あいつらの力はもう自分たちだけのものじゃなかった。武門の誉れ、鬼を退ける力——それは、人間たち皆に必要なものだったんだ。もはや人間たちは闇に脅えるのではなく、同じ人を相手取って生きてゆく時代。あいつらはそれを望んでいた。」

だから、あいつらは鬼なんかになんか負けていらなかったんだ。どんな事をしたって、勝って、帰らなきゃいけなかった。人間は、

もうどんな闇にも負けないと示すために」

伊吹瓢を掲げ、萃香はそこからぐびりと酒を呷る。

「でもなあ。私はそれが悔しいんだよ。そんな事をしなくたって、あいつらは、私達に勝てたはずなんだ。当の本人の私が言うんだ、間違いない」

懐旧か、悔恨か、感傷か。いずれにしたって鬼には似合いもしない想いだらう。けれど萃香は、大江山の伊吹童子は、ずっとその事を抱え生きてきた。

これまでも、そして、きつとこれからも。

「……私はね、霊夢。私が思っうがまま、私が望むがまま、鬼であるだけさ」

済んだ夜空を見上げ、霊夢の緋袴にだらしなく頬を埋めて。萃香は口元にこぼれた酒をぬぐう。

「ああ、今日も月が綺麗だ」

霊夢の膝上で目を細め、ほんのりと染まった頬を擦りつけて。幻想郷の鬼は満足げに唇を緩める。

「こうして今日も、博麗の巫女を独り占めできるんだ。こんなに贅沢な事はないさ」

「わざわざ攫わなくても、ここにいろわよ」

「——だからさ」

萃香はゆつくりと右手を掲げた。振り上げた拳に、途方もない力を込めて撃ち放つ。

ばきん、と。

済んだ音とともに空が砕け——ばらばらと。破片になった月は、

きらきら輝きながら神社の境内へと降り注いだ。

その破片の小さな一つを、すいと掴み取り。萃香は霊夢の持つ盃へと浮かべる。

「——言ったら、鬼は嘘をつかない」

「……そうね」

吐息と共に盃を受け取って、霊夢はそれを静かに干す。

喉が焼けるような強烈な酒精が、かあと身体の内を燃やしてゆく。

ほんのりと赤く染まる頬と首筋——なぜだかそれを見られるのが気恥ずかしくて、つい視線を反らす霊夢に。

萃香はもう一度笑って、霊夢の手にした空の盃を傾け、そこから滴る雫を舐めた。

(了)

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『酔々流転の百鬼夜行』は、かつての妖怪の山の支配者であった鬼、伊吹萃香と、彼女をめぐるちよとした陰謀や、博麗の巫女との関係性を描いたりする、当サークル二十三冊目のSS本となります。

萃香といえは、源頼光による大江山の酒天童子退治があります。過去多くの物語で語られているお話ですが、これらは時代を下るにつれて、頼光たちの活躍を描くよりも、毒酒を吞まされて討たれた鬼達の嘆きを描く方向にシフトしていきます。「鬼に横道はない」という星熊童子の叫びからも、いつしか畏られるべき鬼達のほうに感情移入されていたというのは実に面白いことではないかと思えます。

これまでの当サークルの本にも、霊夢が登場するたびに萃香は折に触れ姿を見せていました。彼女がいつも霊夢のそばに居たがる理由や、博麗の巫女は誰にも平等であるという描写をもとに、「最も戦いたい相手と戦えなかった鬼」のイメージを膨らませていった結果が本文の萃香像に繋がりました。騒がしき百万鬼夜行と名乗り、酒に酔って底抜けに明るい姿ながらも、どこか孤独で寂しげな一人の鬼。人に畏れられながらも人に焦がれる彼女の魅力がうまう引き出せていますかどうか。

そして登場のたび悪役ばかりで扱いに申し訳なさでいっぱいの子の青娥娘ですが……個人的には彼女はこれくらいの悪さをしてくれるのが一番魅力的だと思うんです。いや、本当にごめんなさい。

今回の表紙には、四季悠々様 (pixiv id:692649) の素材をお借りしました。いつもありがとうございます。

また、発刊にあたり、いつもながら白身氏、R i z a氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせて頂きます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

「酔々流転の百鬼夜行」

平成24年12月23日

東方晴天祭

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の

「東方 project」の二次創作です。





表紙：四季悠々様
東方project Fanbook 2012.12.23 折葉坂三番地